一年国語甲の実習指導について

高　瀬　　允

指導の方針について

国語甲としての学習は本校においては教科書中の現代文を特に重視して取り扱うことにしている。甲は週二時間であるから教科書中の教材だけでは稍不足になることが多い。現行の教科書はその点で不備の点がある。今回私の分担は甲の実習指導であり，期間は三週間，時間数六時間である。これが全部現代文の学習にあたるが，こうした甲乙の区分は本校における便宜的なものであるから，実習生ならずとも最初によく説明が必要となる。さて甲を分担し実習することがきまった学生諸君に教材のあらましを説明していると，毎年のことだが教生は全く戸惑ってしまう。つまりこれらの教材は読めばそのままだし，説明を加えるにしても語句の注解以上にどこまで入り得るかという疑問がでる。どんなふうにと簡単にはいえないから，そんなことは高校で教わって来たやり方を思い出せば参考になるだろうとつっぱなすと，高校では殆ど読むだけでしたと答える。矢張り現代文が扱い難いのは，これら教師の卵諸君の時からであって，教師になってからもつづくものであるらしい。

今年は後述のように随筆の単元を使って実習を課したので，特にそのような事前の心配は強かったらしい。それに対して私は次のように基本の方針を考えることにした。

現代文の教材は広い範囲にわたっている点を認識すること。個々の単元に分れた場合にも日本のみならず世界文学の立場から眺めていること。一年生で習ったものが三年生までの間に繰返されることが少ないこと。古文の場合と異って訓練的な面が少いこと。記憶をたよるよりはむしろ教室における思考能力を伸ばすことが目標になること。言語的な訓練は軽視できないこと。青年期の読書意欲へ結びつかせること。等々が目標としてあげられようが，これでは雑然としてとりとめがない。教生実習にかぎらずいつも問題となる点からのべて見たい。

一、現代文は思考形成の場であること

いうまでもないことだが，現実には軽視されているのではなかろうか。それは日本従来の文学教育の餘風と教材そのものの文芸性とが左右する。それ故こうした訓練はフランスあたりのように初等教育で厳密にやる必要があるのであって，日本のように高校から特に目立って思想的教材が多くなるというのでは，なかなか生徒がなじみ難いのも無理はない。卑近な例だが，中学校あたりで，どこまでに何が書いてあったかという訓練が割合多く見られるが，それが単なる段落切りの形式的作業になっているのをよく見かける。作者の体験を追体験し，作者の思想を自已の内に再形成する作業は，高校ではもっと時間をかけるべきであり，また教師の誘導を必要とすることであろうと思われる。

生徒各自の思考は発表を伴わねばならぬから教室における発表は重要となる。但し多くの場合，時間を節約して一人二人の発表だけですませて行くがその点にも問題がある。教生に対してはこの点を特に要望して五人でも十人でもいわせなければならぬといっておいた。

二、読み方に注意して語句の注解を軽視したこと

現在の高校生の読む力が低いことは周知のことだが，それ故「読むこと」は厳密にやらねばならない。そして語句の解説は省略化してよいという方針をたてた。語句とは多分こんなものであるという目あてがついた所で結構でそれ以上の説明は不用である。但し，特に興味のありそうなもの，二，三をとりあげて詳しく説明することは良い。その際なるべく興味本位にやるべきである。頭注その他を教授者が繰り返す必要はない旨をのべておいた。このやり方では僅かだが逸脱もあったことを申し添えておく。

三、教授者の視野の拡大（特に単元構成について）

限られた時間内で文学の一ジャンルをことごとく教えきれるものではない。加えて一年の時に随筆を学習すれば二，三年ではまあでてこない。それを思うと単元構成は最も苦心のいる点である。しかし教科書によって授業をすすめて行くのである以上，教科書の教材はどうしても基本となる。基本教材に何を補足すべきか。は教授者は常に留意すべき問題である。できる限り他の教科書を参照して教授者自身の頭の中に，まとまった大きな単元を構成していなくてはならぬ。予期したことが全部教えられるかどうかが問題なのではない。それだけの準備がなければ自信をもって授業をすすめることができない。そんな見地から一単元の最後に余裕時間をおき（今回の場合は三週間六時間であるから単元を五時間ですませて残り一時間を増加教材の時間とした）教生の自由指導の時間とした。
以上の三項目ではまだつくせぬが，実習の初歩知識に関することは別として，大体こちらの意図をつたえたわけである。学習指導案の書き方等はともかく，授業はその時間になって見なければ分らない。指導教官と雖も教生の個性にまではタッチできないからあとは個々の授業の問題になる。

*　　*　　*

教材単元の選定について

本校で採用している大修館の高等国語一上下では現代文の教材は次の通りである。

一上○近代詩
　○紀　行（含，奥の細道）
　○放　送
　○会話，談話
　○随　筆
　○国語の変遷

一下○読　書
　○短篇小説
　○手　紙
　○演　劇

教生実習が始まった十月一日現在の進度は下巻の短篇小説であったが，それを中止して，上巻の「随筆」を教生用にのこしておいたのをやることにした。会話，談話，放送という所でも差支えは別にないが，教育実習のためには少し特殊教材すぎることがある。例年こう

して見てゆくと，随筆とか手紙とかに落着くことが多いわけである。

「随筆」の構成（一上109P—127P）

(1) 波　の　音　　和達清夫

(2) 山　の　友　へ　　松方三郎

(3) イギリスの青少年　　池田　潔

ここに見られる特色は大体軽く読み流すものとして扱っている点である。他書のように「随筆について」というような解説も解説的教材も見られない。しかし今は，随筆単元として随筆の特質を併せて教えるように扱って見た。つまり，随筆の解説を冒頭におくこと，勿論普通の教師であればそれは当然であるが，教生実習には教材なしの解説は至難のことである。しかし何とか簡単にまとめて解説をし三課を学習した上で最後に随筆の何たるかに帰らせる。こういう考えで教生諸君の指導案は(1)波の音から始まるわけである。

（丁度この時二年の甲でも随筆に入って，この本では二年らしい程度でエッセイの解説から始まる。教える教生は両方受持つわけだから一，二年の程度の差が見られるのも良かろうと思った。ただ私自身は一，二年の程度の差は古文を除いて殆んどみとめられないと思うのだが）

前にものべたようにこの単元は易しいものである。これがもし古文の間にはさまっていたりすると多くの学校では息ぬき教材になるに相違ない。どうも現代文がこの息ぬき的待遇をうけている間は，折角の教材が迷惑する。その意味ではシンのある文章をえらび，必ず読み流しできない個所を持たせることが重要であろう。一年生だからといって平易な文章から入らせる考え方があまりに普及しすぎているのであろう。

学習指導案とその形式

一年C組　　国語科学習指導案

昭和三十一年十月三日　水曜　四限

単元および学習内容

五　随筆　(1)　波の音

本時の目標

1，文学のジャンルとしての随筆の特質を理解する。

2，段落に分けて，文意を把握し，また作者のものの見方，感じ方を理解し，人生に対する視野を広くする。

学習活動

1，文学のジャンルとしての随筆の特質について考え，簡単に説明を加える。　（15分）

2，本文の指名読（四名）
正しい読みに注意する。
3，段落に分けて文意をつかむ。　（15分）

4，語句について調べる。　（10分）

5，作者のものの見方，感じ方について考え，論旨の構成，論述の順序を把握する（指名して生徒の解答を求め，後で指導者がまとめる）　（10分）

以上は一例である。重要なことは学習活動の個所であり，きちんと時間配分をしておいてもうまく行くとは限らない。思いがけぬ見当ちがいも出てくる。指導教官は記載された指導案の妥当性を第一に考え，抽象的な表現個所について一々具体案をただしておかねばならない。のみならず一実習生の体験のみで成案は得られない。三クラス同じ教材が異った教生によって行われるから比較検討している中に，次第に望ましい形態が得られることになる。いま，この指導案によって行われた授業の際の私のメモを併記してみることにする。

学習活動の項について

導入にあたって「エッセイとはどんなものか知っているか」という問は唐突な感じであった。教授者はエッセイと随筆の差ということを強調しなかったらしいがそれを最初から説くことは無理である（前にもふれた二年生の教科書ではこの点の概説から入っている）随筆とかエッセイということば自体が生徒には奇異なので，内容はむしろ親しいものである。なるべく身近から説きおこしてエッセイの解説に入り，さらにモンテーニュ，ベーコンまで言及することは可能であろう。へき頭に生徒の頭を悩ませるような問を発したのは効果的ではなかった。また枕草子，徒然草にふれたのは結構であるが，その時代精神という点などで深入りしすぎてはいけない。今の場合の教材と随筆そのものの性格の問題とは一応問題が別であると思わねばならない。無理もないことであるが，教生の講義をきいていると，大学の講義がそのまま出てきて，ほほえましいが生徒には時々何の事か分らぬだろうという個所がある。書名の問題，異本の問題などがそうである。

読み方については教授者はしっかりしていた。一年生の程度では矢張り，間違えた個所を記憶していてはっきり指摘する必要がある。殊に現在の生徒はひらがなとの連記の個所をいいかげんにする共通の傾向がある。私は範読をいつもする必要は認めないが，注意はなるべく詳しくするように要望をしておいた。さて3の段落に分けて文意をつかむの所では読みと合せて15分という時間が少々疑問であった。教授者は簡単に段落は切れると思っていたようであるが，事実はそう簡単ではなかった。稍機械的に第一段，第二段という数字的な区分が教授者から半ば与えられたので，生徒の中からそれに対する疑義が出た。これは至極当然で論旨構成の軽重を考慮に入れなかったのでつけ足しのごとき二三行の個所がどちらに所属するかで質問が起ったのである。かような教材では構成の要点をつかむ方が大事で行数にこだわり段数にとらわれる必要はないようである。従ってまた，語句について調べるという10分間を経過してから段落についてと進むべきであった。語句を一々あげてはこの教材は50分では到底すまない。私の学校では生徒の能力とにらみ合せて，この教材は50分間でけりをつけることを要求してあったから教授者はこのあたりから稍いそぎ気味，最後の所がそのために教授者の話の要素が強くなったのも止むを得ない。ただその際に，ペラペラと口が進みすぎるのが後できいていて気になる。生徒の納得を待つという僅かな間を持つことが何分最初の体験だからうまく行かない。科学的な随筆であるという所までうまくまとめはしたが，どこか余裕のない文章のようになってしまった。作者の意図したしみじみとした味わいが中途から消えたようである。

だが態度，語調，発音，板書，なかなか良くできた。この調子ならあと四，五回のうちにすっかり上達するものと思われる。

実習授業中に現われた問題

1，随筆の解説という点では約20分間にまとめることの難しさが共通の問題としてのこった。結局，エッセイということばは持ち出すにしても随筆とエッセイとの違いというようなことは後まわしにし，日本の現状における随筆の多様性を認識させ，学習させた教材がそのどれに属するかを考えさせる程度に止まる。つまり学習後の処置がより有効のようである。

2，「波の音」について

頭から科学的随筆として内容の科学性を重視する傾向と，単なる随筆として物理学的要素をはなれて味読する傾向とに分れた。どちらともいえぬが，この課が丁度随筆の特質を説明していることに注目させながら読みすすめる方が効果的であろう。論旨の要約ということは，それ故に学問的すぎることがないようにすべきである。極端にいえば波の音の科学的現象の成因は忘れても，こんな感じの随筆をよんだという記憶が大切なようである。語句の注釈について，横道に入ること自体はそう悪いことではないが教材といつも結びつけておく注意がとかくおろそかになる。

目標として例えば「この教材によって科学者の随筆を通じて，卑近な現象を科学的に考察しようとする態度を学ばせる。」というような指導案があるが，書式として結構ではあるもののどこか物足りなさが感じられる。それよりは関連性のある他の随筆，書名，著者名等を出来るだけこの機会を通じて生徒と話し合うのが望ましい。

3，「山の友へ」について

教材が稍教訓的なものであっただけにやりにくそうな感じであった。例えば——

「波の音」は科学的随筆だったが「山の友へ」は処世訓ともいうべき性格をおびている。随筆には論文のごとき秩序はないから特にこのような深い意味を持った文には構成面を探究して作者の主張を正しくつかみとることが肝要である。——とする意見には大体賛成であるが構成というほどの大きな骨組みはつかむことはできなかろう。元来が随筆なのであるから，それにかなり長文であるから余計簡明に作者のいいたいことをとらえる必要がある。この課はあまり面白くなく過ぎて行った。だから山登りの話を持ち出し登山文学へ向けて行った教生もあった。それも一つの行き方であって，この課の松方三郎氏の教訓は全部オミットして教えることも生徒には印象にのこるであろう。これ程のものを，ことごとしく教授者が再説していると時間ばかりかかることになる。但し——この文が登山教育論であるばかりでなく人間教育論でもあり，いってみれば人間教育方法論のの一つとしての登山教育論であることを説明して，特にそういう記述のある部分について考えてみる。——という主旨は勿論正しいことである。それがあまりに押付けがましくならぬ注意が望ましいというわけである。

4，「イギリスの青少年」について

これも稍長文であるから，重点的な取扱い方がされた。良い効果があったと思うのは教授者が作者の「よき時代のよき大学」をすっかり読んで来て，イギリス人の考え方を補足説明したことであった。それと文中における語の意義，例えば「概念的」「怯惰の弁」などを原義から説いて適訳を求めさせた作業などは，読解力の養成に役立つ所があった。イギリス人の常識というものがこの課ではうかび上ってくるが，生徒の方にもそれに対する批

判がでてくる。そうした質問をうまく処理するには原作を通読しておくにこす事はない。

5，教科書收の三つの文は三時間で片がついたので更に一時間分の補充教材をプリントしてもらったが採られた教材を列記すると，

日　暦（森田たま「もめん随筆」）

水　　（幸田　文「こんなこと」）

浅春随筆（栃内吉彦）

等であり，あるクラスでは，作文（随筆）を課し，その中から教材を求めたのも良い試みであった。

従って以上の実習時間の内容を整理すると，三週間の授業内容は次の通りとなった。

第二時　単元「随筆」に入る。及び「波の音」

第三時　「山の友へ」

第四時　「イギリスの青少年」

第五時　随筆の整理と補充教材

第六時　作文または単元「小説」のつづき

第一時…は指導教官の授業参観があった級と第六時として「小説」のつづきをやった級がある。この中，第四時の「イギリスの青少年」の所で研究授業が行われた。

*　　*　　*

これらの授業は教授者自身として，どんな反省をしつつ行われているか。以下に少しく記してみることにする。

全般的に最初の中は，始めて教壇に上ったという緊張感から思ったようにやれないという声が多いが，それはごく最初の中だけで三時間目にはもうぐっと落着いて来ている。だが次に出てくるのは生徒に徹底させることが出来なかったのではないかという反省で，順序の不備，準備の不足などがあげられている。尤なことである。中には生徒の示した反応を確かにキャッチして成功感を味わっているものもある。生徒の動きに気がつき始めるのは総じて第二週に入ってからのようである。第三週は質問の対策にかなり苦心を払っている。教生自身の反省は非常に真面目に行われ，またそれに対する他の見学者の感想記録も細かい点を指摘している。例えば板書の正誤，声の調子，質問に対する処置等について，むしろ自分を誠めるような記述が多いことは，今期の教生の熱心さを物語るものとして喜ばしいことであった。ただ物足りぬ点は国語甲というものを最初は恐れ，次には次第に安易感を持ってくることである。常に現代文の本質を把握しつつ教えるという気概があまり見られなかったのが残念である。教科書出版社で出している教授資料が大切な種本である間は，十分な授業は望めないであろう。私は併し授業は結局学力に帰するものであると痛感した。初歩の技術的な段階でつまずいている教生は毎年殆ど見られないのであって，教生が最後に悟る所は学力不足ということである。大変良いことだと思う。これだけは実際授業をして見ればいやでも思い知らされることなのであるから。

教生が最後に生徒の声をきいて，反省の資としていたのも良いことであった。褒貶さまざまであるが，真面目な教生を生徒は結局良いとする感想が圧倒的であった。